

泌尿器科以外を受診した際の尿沈渣検査が診断に有用だった膀胱癌の一例

◎中島 和希¹⁾、糸井 祐依¹⁾、中村 真佐徳¹⁾、駒井 隆夫¹⁾
兵庫県立尼崎総合医療センター¹⁾

はじめに

尿沈渣は、腎・尿路系疾患の病態把握に極めて重要な検査である。特に、異型細胞を捉えることは、細胞診検査や、画像検査などの次の検査に進めることができる有力な情報となる。今回、尿沈渣で異型細胞を検出したことを機に、膀胱癌と診断された症例を経験したので報告をする。

症例

症例は 60 歳代男性。病歴は、糖尿病、右腎結石、心不全。糖尿病で、当院糖尿病内科に通院中である。その際に、尿検査を実施したところ、異型細胞が認められたため、泌尿器科へ紹介受診となった。

検査所見

尿沈渣所見：当院糖尿病内科に通院中の尿定性検査では、潜血(-)、糖(4+)、蛋白(-)、白血球(-)であった。尿沈渣検査は、赤血球 1-4/HPF、白血球 1-4/HPF、尿細管上皮 1-4/HPF、尿路上皮細胞 5-9/HPF、異型細胞(+)であった。S 染色した尿沈渣像を観察したところ、異型細胞と思われる細胞が孤立散在性から細胞集塊として見られた。細胞異型は、

N/C 比大、核クロマチンの増量、核形不整が認められた。

追加検査所見：再来時には、追加検査として、尿細胞診検査、造影 CT 検査、膀胱鏡検査を行い、尿細胞診検査で、尿路上皮癌疑い、膀胱鏡検査で、膀胱右側壁に乳頭状腫瘍を認めた等の所見から膀胱癌と考えた。その後、治療のため、再々来院し、経尿道的膀胱腫瘍摘出術(TUR-BT)を施行した。その後、組織診断の結果から、高異型度尿路上皮癌 Grade2 と診断された。

結語

今回、当院糖尿病内科に通院中の患者尿検体から異型細胞が認められ、膀胱癌を早期に診断することができた。尿沈渣は、スクリーニング検査として幅広い患者を対象としており、臨床的に悪性腫瘍を疑わない段階での異型細胞の検出は、非常に意義が大きいと言える。今後も、尿沈渣から臨床的に予期せぬ情報を伝えることが、重要だと考える。

連絡先 06-6480-7000(内線 2014)